



Title	Kiga語の命令形
Author(s)	梶, 茂樹
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2024, 35, p. 90-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Kiga 語の命令形 The Imperative of Rukiga

梶 茂樹*
KAJI Shigeki

0. はじめに

本稿はウガンダ南西部に話される Kiga 語¹の命令形²について述べる。Kiga 語には命令表現として (1) のような形式がある。

- (1) a. 命令形
- b. 接続法
- c. 動詞 okureka 「止める」の命令形を用いた否定命令
- d. 動詞 okureka 「止める」の接続法形を用いた肯定・否定命令

Kiga 語の命令形は、(1) に記した様々な命令表現の基本となるものであるが、これは 2 人称単数に対してしか用いられず、しかも肯定形のみ存在する。2 人称単数に対する否定形は命令形にはない。また 2 人称複数に対しては肯定形も否定形も存在しない。これらには命令形以外の形式 (1b, c, d) を用いる。従って、Kiga 語の命令形は比較的コンパクトにまとまっており、主語関係節形や目的関係節形、またその他の従属節形など、一般に多数の変化形を擁する Kiga 語の動詞活用において極めて特殊な領域を形成している。

しかしながら、命令形は、他の活用では考慮する必要のない幾つかの項目が係わってくるため、実際はかなり複雑である。本稿は、命令形形成に係る全ての要素を考慮し、その全体像を描き出すことを目的とする。命令形以外の命令表現については、ここでは述べず、別の機会に譲る。

* 京都大学名誉教授 (professor emeritus at Kyoto University)、現京都産業大学ことばの科学研究センター研究員 (research associate at the Center for Language Studies, Kyoto Sangyo University)

¹ バンツール系。Simons et al. (eds.) (2017) は、話者数を 2004 年の部族人口統計をベースに、その北の Nkore 語話者と合わせて 2,390,000 人としている。Kiga 語は Nkore 語とよく似ており、まとめて Runyankore-Rukiga とされることが多い。しかし Kiga 語は Nkore 語とは細かいところでは異なっており、本稿は Kiga 語のみについて述べる。なお Simons et al. (eds.) (2017) は Kiga 語を Chiga としている。これは Kiga [ciga] の初頭子音 [c] を破擦音 [tʃ] と聞き誤ったものと思われる。ウガンダ西部の言語は言語名にクラス 11 の接頭辞 ru- を用い、Runyankore 「ンコレ語」、Rukiga 「チガ語」のように表現する (Runyankore の -nya- は語幹形成要素)。Kiga 語の全体像は Kaji (2023) を参照されたい。また動詞体系については現在 Kaji (in preparation) としてまとめつつある。

² 接続法に合わせて命令法と言うべきかもしれないが、ここでは命令形としておく。

1. 命令形

Kiga 語の命令形を正しく導き出すためには、(2) に掲げる 5 つの事項を考慮しなければならない。もちろんこれら以外にも、Kiga 語に係る一般的規則もある。特に高声調の予期は重要で、これは 1.2 節で述べる。

- (2) a. 語根 (Rad) の声調
- b. 語基³の音節構造
- c. 目的代名詞が用いられるか用いられないか
- d. 目的代名詞が 1 人称単数の場合
- e. 目的代名詞が再帰代名詞の場合

1.1. 語根 (Rad) の声調

Kiga 語の基本声調は高声調 (H: high) と低声調 (L: low) の 2 つである⁴。そして動詞語根も L 語根のもの (3a) と H 語根 (3b) のものとがある。また 1 例のみであるが、(3c) で示した -gi- ~-gi- 「行く」 の場合のように、語根声調が状況によって H になったり L になったりするものがある。

(3) で語根のあとに書いてあるのは単独で発音した場合の動詞不定形である。そしてそのあとに不定形を音素表記したものを書いてある (ただし表記は正書法的)。不定形には通常、前接辞の o- と名詞接頭辞の ku- が付き、語末に動詞語尾の -a が付く。o-ku-temb-uruk-a 「降りる」 における -uruk- のように、語根 -temb- と語尾 -a の間にあるものは接尾辞などの動詞拡張辞⁵である。これらのうち語彙の声調を有するのは語根のみである (語根は必ず母音 1 個を含み、しかも 1 個のみであることに注意)。動詞形において語根以外に H 声調が付与されることがあるが、それは文法的声調である。以下、語根から動詞拡張辞までを動詞語基 (base)、そして語根から語尾までの部分を動詞語幹 (stem) と呼ぶ。

(3) a. L 声調語根

1. -gu- okugwa⁶ /okugwa/ 「倒れる、失敗する」

³ 語基とは 1.1 節 で述べるが、動詞語根から派生接尾辞までの部分を指す。ただし派生接尾辞などの拡張辞が付かず、語根だけの場合もある。

⁴ ただし、あとで見るように、音声的環境により下降調 (F: falling) が生じる場合がある。上昇調 (R: rising) は Kiga 語では生じない。またダウンステップ高声調も生じない。

⁵ 正確には派生接尾辞 (使役や適用など意味のある拡張辞) と形式的拡大辞 (使役や適用などの意味を持たない単なる形式的拡張辞) とに分かれるが、声調の観点からは区別がないので、ここでは区別せずに、まとめて動詞拡張辞としておく。

⁶ Kiga 語の表記はほぼ正書法に従う。ただし本稿では正書法では用いない母音の長音記号 : を用い、また母音に声調記号を付与する。高声調 H は ^、下降調 F は ^、そして低声調 L はマークなしである。正書法の発音で注意すべきは以下の通りである。gy [j], gi [ji], ky [c], ki [ci], sh [ʃ], j [ʒ], y [ji], bwV [bgV], rwV [gwV], myV [jV] (ここで V は任意の母音)。Kiga 語は半母音による軟

- | | | | | |
|----|---------|--------------|----------------|-----------|
| 2. | -shek- | okusheka | /okusheka/ | 「笑う」 |
| 3. | -gyend- | okugyenda | /okugyenda/ | 「行く、出かける」 |
| 4. | -temb- | okutemburuka | /okutemburuka/ | 「降りる」 |
- b. H 声調語根
- | | | | | |
|----|---------|-----------------|-------------------|------------|
| 1. | -rí- | okúrya | /okuryá/ | 「食べる」 |
| 2. | -kór- | okúkora | /okukóra/ | 「行う、する、働く」 |
| 3. | -kyéng- | okukyê:nga | /okukyénga/ | 「理解する」 |
| 4. | -téb- | okutébenkani:sa | /okutébenkani:sa/ | 「準備する」 |
- c. H～L 声調語根
- gí- ～ -gi- okúza～okuza⁷ /okúza/ ～ /okuza/ 「行く」

1.2. H 声調の予期

Kiga 語の声調規則の基本的なものが (3) の例に現れているのでここで解説する。これを理解しておかないと、動詞形の声調が理解できない。例えば (3b4) /okutébenkani:sa/ 「準備する」 の場合のように、語根の H 声調が語末のポーズから 3 音節、あるいはそれ以上離れている場合は、H 声調はその位置でそのまま実現されるが、H 声調が語末音節あるいは語末前音節にある場合はポーズの前では 1 音節左にずれて実現される。つまり、H 声調の予期が起こるのである。従って (3b2) /okukóra/ 「行う、する、働く」 はポーズの前では okúkora となり、(3b1) /okuryá/ 「食べる」 は同じく okúrya となる。ただし、ポーズの前で H 声調の予期が起こるのは、H の音節が短い (1 モーラ) 場合のみで、(3b3) /okukyénga/ 「理解する」 のように、H 声調がある語末前音節が長い (2 モーラ) 場合⁸は、H 声調の予期は起こらず、その位置で実現される。その場合、声調は H ではなく F となる。Kiga 語では語末音節が長い単語は存在しない。以上をまとめたのが (4) である。

- (4) a. H 声調が語末のポーズから 3 音節、あるいはそれ以上離れている場合
- /o-ku-téb-enkani:s-a/ → okutébenkani:sa 「準備する」
- b. H 声調が語末音節にある場合⁹
- /o-ku-rí-a/ → okuryá → okúrya 「食べる」

口蓋化、硬口蓋化が特徴的に起こる。Kiga 語の軟口蓋化、硬口蓋化については Kaji (2024) 参照。

⁷ 不定形 okúza～okuza の [z] 音は、gi-a> gya> za のように派生される。

⁸ Kiga 語には音韻的長母音と音声的長母音とがある。音韻的短母音は、あとに鼻音複合が続く場合、また母音の前の母音が半母音化された場合、代償延長として長音化が生じる。この母音の長音化は母音の声調が H あるいは F の場合は顕著 (2 モーラ) であるが、L の場合は、H あるいは F の場合ほど顕著ではない (1.5 モーラ程)。この場合は長母音記号は付けない。

⁹ H 声調は元々は語根 -rí- の上にあるが、-rí- の i が音節性を失い、語尾の -a と融合し -ryá とし、て音節を形成すると (-rí-a> -ryá)、H 声調は語末音節の母音の上に来る。

- c. H 声調が語末前音節にあり短い (1 モーラ) 場合
 /o-ku-kór-a/ → okúkora 「行こう、する、働く」
- d. H 声調が語末前音節にあり長い (2 モーラ) 場合
 /o-ku-kyéng-a/ → okukyê:nga 「理解する」

2. 命令形の基本構造

命令形の基本構造は、語根からの語尾までの語幹をそのまま用いる。(5) 参照。その際、H 語根の H 声調は消え (5b)、L 動詞と H 動詞の区別は中和する。ただし、これは目的代名詞が用いられない場合で、2.1 節で見るように、目的代名詞が用いられると H 語根の H 声調は保持される。

(5) a. L 語根動詞		語根	不定形
1. Gwa!	「倒れろ、失敗しろ」	-gu-	okugwa
2. Sheka!	「笑え」	-shek-	okusheka
3. Gyenda!	「行け」	-gyend-	okugyenda
4. Temburuka!	「降りろ」	-temb-	okutemburuka
b. H 語根動詞			
1. Rya!	「食べろ」	-rí-	okúrya
2. Kora!	「行え、働け」	-kór-	okúkora
3. Kyenga!	「理解しろ」	-kyéng-	okukyê:nga
4. Tebenkani:sa!	「準備しろ」	-téb-	okutébenkani:sa
c. H～L 語根動詞			
Za! ¹⁰	「行け」	-gí-～-gi-	okúza～okuza

2.1. 目的代名詞が用いられる場合

命令形に目的代名詞が用いられると命令形の様相は一変する。その場合、目的代名詞が 1 人称単数の場合と再帰形の場合はさらに形が変化するので、まず 2.1.1 節で、この 2 つ以外の場合について述べ、続いて 2.1.2 節で目的代名詞が 1 人称単数の場合、そして 2.1.3 節で目的代名詞が再帰形の場合について述べる。

(6) に Kiga 語のクラス、人称ごとの目的代名詞を示す。Kiga 語の再帰代名詞形は本来 -i- であるが、Nkore 語の影響もあり、-i- ではなく -é- を用いることが多い。意味は同じである。なお、クラス 19 (単数) とクラス 20 (複数) は拡大クラス、クラス 21 は場所クラスの 1

¹⁰ 動詞 -gí-～-gi- 「行く」 (不定形 okúza～okuza) は通常、行く場所を目的語として従えて用いられる。従って、Za! 「行け」のように目的語なしで用いられることは普通はない。目的語なしに「行け」という場合は、-gyend- 「行く、出かける」 (不定形 okugyenda) を用い、Gyenda! 「行け」 (5a3) のように言う。

つである。

(6) クラス (単数)		クラス (複数)	
1.	1 人称単数 -n-	2.	1 人称複数 -tu-
	2 人称単数 -ku-		2 人称複数 -ba-
	3 人称単数 -mu-		3 人称複数 -ba-
3.	-gu-	4.	-yi-
5.	-ri-	6.	-ga-
7.	-ki-	8.	-bi-
9.	-yi- / -gi-	10.	-zi-
11.	-ru-		
12.	-ka-	14.	-bu-
13.	-tu-		
15.	-ku-		
16.	-ha-		
17.	*-ku- ¹¹		
18.	*-mu-		
19.	-gu-	20.	-ga-
21.	*-yi-		

2.1.1. 目的代名詞が 1 人称単数と再帰形以外の場合

目的代名詞が 1 人称単数と再帰形以外の場合というのは、最も普通に目的代名詞が用いられる場合である。(7) と (11) に、L 語根タイプと H 語根タイプの命令形において、目的語名詞が付いた場合 (a の形) と、その目的語名詞が代名詞化された場合 (b の形) とを示す。目的代名詞は動詞構造の中に取り込まれる。すなわち語根の前に付き、動詞と一体化する。目的語が名詞の場合は動詞に後置し、動詞と一体化しない。(7.3) の -gyend- 「行く、出かける」はそのままでは目的語が使いにくいので適用の接尾辞 -er- 「(人の) ために」を挿入してある (不定形 okugyendera 「(人の) ために行く」)。

(7) L 語根動詞		語根	不定形
1.	a. Gwa ekigyezo!	「試験に落ちろ」	-gu- okugwa
	b. Kígwe!	「それに落ちろ」	
2.	a. Sheka Píta!	「ピーターを笑え」	-shek- okusheka
	b. Mushéke!	「彼を笑え」	

¹¹ 場所クラス (クラス 16, 17, 18, 21) の目的代名詞で用いられるのはクラス 16 の -ha- のみである。それ以外は接語となる。

3. a. Gyendera Píta! 「ピーターのために行け」 -gyend- okugyendera
 b. Mugyé:ndere! 「彼のために行け」
 4. a. Temburuka omúsozi! 「丘を降りろ」 -temb- okutemburuka
 b. Gutembúruke! 「それを降りろ」

まず (7) の L 語根動詞の場合であるが、目的語名詞があとに続く場合は、動詞形の声調は L のままである。しかしながら、目的語名詞が代名詞化され、動詞の前に行くと、語根の 1 つ右の母音に H が付与される。さらに語尾が -a ではなく -e となる。語根の 1 つ右の母音に H が付与されるのは命令形における L 語根動詞の特徴であるが、語尾が -e となるのは L 語根動詞のみならず命令形自体の特徴である。(8) は (7) のそれぞれの b の形の派生プロセスである。

- | | | | | | |
|-----|---------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| (8) | A. 基底形 | B. 音節形成 | C. H の付与 | D. H の予期 | E. 最終形 |
| | a. /ki-gu-e/ | → kigwe | → kigwé | → kígwe | → kígwe |
| | b. /mu-shek-e/ | → musheke | → musheké | → mushéke | → mushéke |
| | c. /mu-gyend-er-e/ | → mugyendere | → mugyendére | → mugyé:ndere | → mugyé:ndere |
| | d. /gu-temb-uruk-e/ | → gutembúruke | → gutembúruke | | → gutembúruke |

まず、分かりやすい (8b) から見てみよう。(8b) 「彼を笑え」の語根は -shek- である (不定形 okusheka 「笑う」)。基底において、語根 -shek- に目的代名詞の -mu- と語尾の -e が付く (A)。続いて、基底形における形態素区分を外して音節を整える作業が行われる (B)。音節形成が行われたあと語根の 1 つ右の母音 -e に H 声調が付与される (C)。そして、それに対して H の予期が起こる (D)。E が最終形である。(8c) もほぼ同様であるが、(8b) の場合は、H の予期が最終音節にあった H に対して起こるのに対して、(8c) では終わりから 2 音節目にある H に対して起こる点異なる。(8d) では付与された H が元々終わりから 3 音節目であるので、何の変化も起こらない。(8a) の場合は単語が短いので少し不規則だが規則には合っている。音節形成のあと H 声調が語根のすぐ右の母音に付与される。そして H の予期が起こり、H は目的代名詞 -ki- の母音の上に行く。このように、H 声調が付与されるのは語根の 1 つ右の母音に対してであり、それが何であるかは個々の場合によって異なる。それは (8a) や (8b) のように語尾の場合もあるし、(8c) や (8d) のように動詞拡張辞の場合もある。

ここで 1 つ疑問が湧いてくる。H 声調の付与を基底の /ki-gu-e/ に対して行えばどうなるのかという疑問である。考えられるのは (9) のような派生である。

- | | | | | | |
|-----|----------------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| (9) | A. 基底形 | B. H の付与 | C. 音節形成 | D. H の予期 | E. 最終形 |
| | a. /ki-gu-e/ | → ki-gu-é | → kigwé | → kígwe | → kígwe |
| | b. /mu-shek-e/ | → mu-shek-é | → musheké | → mushéke | → mushéke |

- c. /mu-gyend-er-e/ → mu-gyend-er-é → mugyendére → mugyé:ndere → mugyé:ndere
 d. /gu-temb-uruk-e/ → gu-temb-úruk-e → gutembúruke → gutembúruke

(9) の派生においても、(8) と同じ結果が得られる。しかしすべての場合においてではない。(10) の派生の例を見てみよう。(10a) と (10b) は、いずれも -gu- 「倒れる、失敗する」と同じく L 声調の単音節語根 -se- (不定形 okusa) 「臼で挽く」に適用の接辞辞 -er- 「(人の) ために」を付けたものである (不定形 okuse:ra <o-ku-se-er-a 「(人の) ために臼で挽く」)。(10a) は (8) と同様の分析、そして (10b) は (9) と同様の分析である。どちらが正しいアウトプットを導き出せるかという (10a) の方である。(10b) のように、音節形成の前に H 声調が語根の 1 つ右の母音に付与されると、/mu-se-er-e/ は mu-se-ér-e となり、それは音声的に musê:re である。Kiga 語では R 声調は許容されないで R は H と認識され musê:re は musé:re となる。そして sé: の音節が長いポーズの前で H の予期は起こらず、最終的に musê:re という誤った結果に至る。これは要するに、H 声調の付与は音節形成のあとに行われなければならないということである¹²。また (10a) の最終形 musé:re ように、H 声調が語末前母音にあっても、本来語末にあり予期されて語末前に行った H は長母音の上にあっても F とはならない。

- | | | | | | |
|------|--------------|--------------|-----------|-----------|-----------|
| (10) | A. 基底形 | B. 音節形成 | C. H の付与 | D. H の予期 | E. 最終形 |
| a. | /mu-se-er-e/ | → muse:re | → muse:ré | → musé:re | → musé:re |
| | A. 基底形 | B. H の付与 | C. 音節形成 | D. H の予期 | E. 最終形 |
| b. | /mu-se-er-e/ | → mu-se-ér-e | → musé:re | | → musê:re |

次に (11) の H 語根動詞の場合を見てみよう。

- | | | | | |
|------|----------------------------|--------------|---------|-----------------|
| (11) | H 語根動詞 | | 語根 | 不定形 |
| 1. | a. Rya eby'ókúrya! | 「食事を食べろ」 | -rí- | okúrya |
| | b. Bírye! | 「それを食べろ」 | | |
| 2. | a. Kora omurimo! | 「仕事をしろ」 | -kór- | okúkora |
| | b. Gúkore! | 「仕事をしろ」 | | |
| 3. | a. Kyenga ekizibu! | 「問題を理解しろ」 | -kyéng- | okukyê:nga |
| | b. Kikyê:nge! | 「問題を理解しろ」 | | |
| 4. | a. Tebenkani:sa obugyenyi! | 「パーティーを準備しろ」 | -téb- | okutébenkani:sa |
| | b. Butébenkani:se! | 「それを準備しろ」 | | |

¹² H 声調が付与されるのは語根の 1 つ右の母音としてきたが、語根の 1 つ右の音節の母音とした方が正確かもしれない。

H 語根動詞は、あとに目的語名詞が続いても、何も続かない場合と同様に、H 声調は消えたままである ((11) の各 a の形)。しかし目的語名詞が代名詞化され、動詞に前接されると ((11) の各 b の形)、語根母音の H が復活する。(12) は (11) の b の形の再録である。H 語根動詞は L 語根動詞と違って、基底にすでに語根の H が存在する。しかしそれ以外のプロセスは同じである¹³。(12a) において音節形成が行われると、/bi-rí-e/ は biryé となるが、Kiga 語では語末の F 声調は許されないので、F は H と認識され、biryé は bírye となる。そして bírye に対して H 声調の予期が起こり、bírye は最終的に bírye となる。(12c) の kikyênge は kikyênge に対して母音 e の長音化とそれに伴う H の F 化が起こっている。

(12)	A. 基底形	B. 音節形成	C. H の予期	D. 最終形
a.	/bi-rí-e/	→ biryé	→ bírye	→ bírye
b.	/gu-kór-e/	→ gukóre	→ gúkore	→ gúkore
c.	/ki-kyéng-e/	→ kikyéngé		→ kikyênge
d.	/bu-téb-enkani:s-e/	→ butébenkani:se		→ butébenkani:se

(13) は H~L 語根動詞の例である。この動詞は目的語に場所名詞を取る。(13a) の例では目的語は Kampála 「カンパラ (ウガンダの首都)」であるが、Kampála が動詞に後置されると動詞の声調は L である。この環境では H 語根動詞、L 語根動詞とも動詞の声調は L なので、この動詞の特徴は現れない。場所名詞を代名詞化すると目的代名詞ではなく、クラス 21 の接語 yó となる。これは動詞に後置し、さらに yó の H が za に予期され Záyo! となる (13b)。(13c) のように動詞を適用形 -gira (<gi-ir-a)¹⁴ 「(人の) ために行く」にして、Pitá 「ピーター (人名)」を目的語としても、動詞の声調は L のままである。これも H 語根動詞、L 語根動詞ともに共通する特徴である。しかし Pitá を目的代名詞化し動詞の前に持っていくと、(13d) のように H 声調が現れる¹⁵。語根ではなく語根の 1 つ右の音節の母音に H が

¹³ ここでは H の付与が基底においてすでに行われている、すなわち語根の声調がそのまま使われていると考えているが、しかし L 語根動詞の場合同様、基底形では H の付与はなく、音節形成のあとに行われるという考えもあると思う。その理由は、H 語根動詞は (5b) に見られるように命令形になれば一度語根の声調は消されるからである。その場合は、(12) は (12') のようになる。最終的にどちらが正しいかはここではペンディングにしておく。

(12')	A. 基底形	B. 音節形成	C. H の付与	D. H の予期	E. 最終形
a.	/bi-ri-e/	→ birye	→ biryé	→ bírye	→ bírye
b.	/gu-kor-e/	→ gukore	→ gukóre	→ gúkore	→ gúkore
c.	/ki-kyeng-e/	→ kikyenge	→ kikyéngé		→ kikyênge
d.	/bu-teb-enkani:s-e/	→ butébenkani:se	→ butébenkani:se		→ butébenkani:se

¹⁴ この動詞は適用形の不定形 okugi:ra 「(人の) ために行く」では L 声調動詞となる。

¹⁵ H 声調が現れるのは mu-gi-ír-e のように語根の右の母音ではなく mugiré のように語尾の -é の上である。これは (10a) の単音節語根 -se- (不定形 okusa) 「臼で挽く」の適用形 -se-er-a (不定形 okuse:ra 「(人の) ために挽く」) の場合と同様である。

現れているため L 語根動詞として振舞っていることが理解される。なお (13d) で H 声調の予期が起こらないのは Mugi:ré のあとに Kampála が来ており、ポーズがないためである。(14) が派生プロセスである。

(13) H～L 語根動詞	語根	不定形
a. Za Kampála!	「カンパラに行け」	-gi-～-gi- okúza～okuza
b. Záyo!	「そこに行け」	
c. Gira Pitá Kampála!	「ピーターのためにカンパラに行け」	
d. Mugi:ré Kampála!	「彼のためにカンパラに行け」	

(14) A. 基底形	B. 音節形成	C. H の付与	D. H の予期	E. 最終形
/mu-gi-ir-e/	→ mugi:re	→ mugi:ré		→ mugi:ré

2.1.2. 目的代名詞が 1 人称単数の場合

目的代名詞が 1 人称単数の -n- 「私」 の場合は語尾が -e とならず -a のままである。ただし、動詞によっては目的代名詞が 2 個用いられる場合があり、その場合、1 人称単数の「私」が目的代名詞として用いられていても、それ以外のものが同時に目的代名詞として用いられる場合は語尾は -e となる。

(15) に L 語根動詞の例として -gur- (不定形 okugura) 「買う」 の場合を示す。(15a, b) は動詞形には H は現れず、今まで言ってきた通りである。そして (15c) のように emótoka 「車」 が代名詞化され -gu- となり、動詞に前置されると語尾は -e となり、語根 -gur- の 1 つ右 -e の上に H 声調が置かれる。そしてこの H はポーズの前なので予期され 1 つ左の母音 u の上に移動する。これも今まで述べてきた通りである。(15d) のように、語根 -gur- に適用の接尾辞 -ir- が付き Pitá 「ピーター」と emótoka 「車」 の 2 つが目的語となっても、目的代名詞が用いられない限り語尾および声調の変化はない。(15e) は (15d) から Pitá 「ピーター」を代名詞化し動詞語根の前においたものである。語根の 1 つ右の母音に H が付与され、そしてこの H はポーズの前ではないので H の予期は起こらない。

問題は (15f, g) である。(15g) は (15e) と構文が並行しているが、目的代名詞が -mu- 「彼」ではなく -n- 「私」である。そして語尾が -e ではなく -a となっている。(15f) のように直接目的語がなくても語尾は -a である。しかし面白いことに、(15h) のように、1 人称単数の「私」が目的代名詞として用いられても、それ以外のものが同時に目的代名詞として用いられると語尾は -e となる。1 人称単数以外の目的代名詞は、1 人称単数のものよりも語尾に対する影響力が強いということになる。(15i) のように、目的代名詞に 1 人称単数以外のものが 2 個用いられても、語尾は -e である。

(15) L 語根動詞 okugura 「買う」
a. Gura! 「買え」

- b. Gura emótoka! 「車を買え」
- c. Gigúre! 「それを買え」
- d. Gurira Pitá emótoka! 「ピーターのために車を買え」
- e. Mugúre emótoka! 「彼のために車を買え」
- f. Ngúrirá 「私のために買え」
- g. Ngúrirá emótoka! 「私のために車を買え」
- h. Gingúrire! 「私のためにそれを買え」
- i. Gimugúrire! 「彼のためにそれを買え」

(16)は(15)と同じことをH語根動詞 *okúkora* 「行う、する、働く」で行ったものである。(16a, b, d)のように目的代名詞が用いられない場合はH語根のHは消され、語尾は -a である。(16c)のように、*omurimo* 「仕事」が代名詞化され -gu- となり動詞語根の前に行くと、語尾は -e となる。(16c)においてはHの予期が起こっている。(16e)のように *Pitá* 「ピーター」が -mu- として代名詞化され、動詞語根の前に行くと、語尾は -e となる。ただし、あとに目的語 *omurimo* 「仕事」が続くためポーズがなくHの予期は起らない。問題は(16f, g)のように1人称単数の -n- 「私」が目的代名詞として用いられると、語尾は -a となるということである。これはL語根動詞の場合同様である。さらに、(16h)のように「私」が目的代名詞として用いられても、それ以外のものが同時に目的代名詞として用いられていると、語尾は -e である。これもL語根動詞の場合と同様である。(16i)のように1人称単数以外の目的代名詞が2つ用いられても、語尾は -e である。

(16) H語根動詞 *okúkora* 「行う、する、働く」

- a. Kora! 「しろ」
- b. Kora omurimo! 「仕事をしろ」
- c. Gúkore! 「それをしろ」
- d. Korera Pitá omurimo! 「ピーターのために仕事をしろ」
- e. Mukóre omurimo! 「彼のために仕事をしろ」
- f. Nkórerá! 「私のために働け」
- g. Nkórerá omurimo! 「私のために仕事をしろ」
- h. Gunkóre! 「私のためにそれをしろ」
- i. Gumukóre! 「彼のためにそれをしろ」

(17)はH～L語根動詞 -gi-～-gi- (不定形 *okúza*～*okuza*) 「行く」の場合である。2つ目的名詞あるいは代名詞が取れるように、適用の接尾辞 -ir- 「(人の) ために」を挿入してある(不定形 *okugira* (<o-ku-gi-ir-a¹⁶ 「(人の) ために行く」)。動詞形は(17a)のように目的代名

¹⁶ 適用形 *okugira* (<o-ku-gi-ir-a 「(人の) ために行く」) は注14で述べたようにL声調動詞である。

詞が用いられない場合の語尾は -a であるが、(17b) のように目的代名詞が 1 人称単数の -n- 以外の -mu- 「彼」 のような場合は語尾が -e となる。そして(17c) のように目的代名詞が -n- 「私」 になると語尾は -a となる。

(17) H～L 語根動詞 okúza～okuza 「行く」

- a. Gira Pitá Kampála! (=13c) 「ピーターのためにカンパラに行け」
- b. Mugi:ré Kampála! (=13d) 「彼のためにカンパラに行け」
- c. Ngirá Kampála! 「私のためにカンパラに行け」

2.1.3. 目的代名詞が再帰形の場合

Kiga 語の再帰代名詞形は 2.1 で述べたように、-i- あるいは -é- である。日常では -é- の方がよく用いられるのでここでは -é- を用いて例を示す。再帰代名詞は目的代名詞の一種であるので、用いられる場合は他の目的代名詞同様、動詞語根の前に来る。しかし再帰代名詞は他の目的代名詞と異なり自身が H 声調を持ち、他のすべての声調を打ち消すという特徴がある。

(18a) のように目的代名詞が -mu- 「彼」 の場合は、H 声調が語根 -gur- の 1 つ右の母音に來ているに対して、(18b) のように目的代名詞が再帰代名詞 -é-¹⁷ の場合は -é- のみの声調が高く、他には H 声調は現れない。(19) の -re:b- 「見る」 の場合も (18) と同様である。(19a) のように目的代名詞が -mu- 「彼」 の場合、H 声調が語根 -re:b- の 1 つ右の母音に來ているが、(19b, c) のように目的代名詞が再帰代名詞になると再帰代名詞 -é- のみの声調が高く、他には H 声調は現れない。

(18) L 語根動詞 -gur- (不定形 okugura) 「買う」

- a. Mugi:ré emótoka! (=15e) 「彼のために車を買え」
- b. Yégurire emótoka! 「自分のために車を買え」

(19) L 語根動詞 -re:b- (不定形 okure:ba) 「見る」

- a. Mure:bé kurungi! 「彼をよく見ろ」
- b. Yére:be! 「自分を見ろ」
- c. Yére:be kurungi! 「自分をよく見ろ」

H 語根動詞の場合も同様である。(20a) では目的代名詞が -mu- 「彼」 であるため、H 声調は語根 -kór- の母音の上に現れるが、(20b) のように目的代名詞が再帰代名詞になると再帰代名詞 -é- のみの声調が高く、語根 -kór- の H 声調は消される。(21a) の場合も、目的代名詞が -gu- 「それ」 の場合は H 声調は語根 -téb- の母音の上に現れるが、(21b) のように目的代名詞が再帰代名詞になると -é- の声調のみが高く、語根 -téb- の H 声調は消される。(22)

¹⁷ é は音節初頭に子音がない場合は y (= [j]) が現れ yé となる。

の単音節動詞の場合も同様である。目的代名詞が **-mu-** 「彼」の場合は H 声調は語根 **-rí-** (実際は、そのあとの適用の **-ir-** と融合して **-rí-ir-** > **-rí:r-**) の母音の上に現れるが、(22b, c) のように目的代名詞が再帰代名詞になると再帰代名詞 **-é-** の声調のみが高く、語根 **-rí-** の H 声調は消される。

(20) H 語根動詞 **-kór-** (不定形 **okúkora**) 「行う、する、働く」

- a. **Mukóre!** 「彼のために働け」
- b. **Yékorere!** 「自分のために働け」

(21) H 語根動詞 **-téb-** (不定形 **okutébenkani:sa**) 「準備する」

- a. **Gutébenkani:se!** 「それを準備しろ」
- b. **Yétebenkani:se!** 「自分自身を整えろ」

(22) H 語根動詞 **-rí-** (不定形 **okúrya**) 「食べる」

- a. **Murí:re kabaragára!** 「彼のためにおやつ用バナナを食べろ」
- b. **Yéri:re!** 「自分のために食べろ」
- c. **Yéri:re kabaragára!** 「自分のためにおやつ用バナナを食べろ」

3. まとめ

本稿は Kiga 語の命令形の特徴について述べた。Kiga 語の命令形とは、Kiga 語に幾つかある命令表現の 1 つであるが、そのうち最もよく用いられるものである。Kiga 語の命令形は、2 人称単数に対してのみ用いられ、しかも肯定形しか存在しない。2 人称単数に対する否定命令形は命令形にはない。また 2 人称複数に対しては肯定形も否定形も存在しない。このように、Kiga 語の命令形は意味的には使用範囲が狭いが、その形成には、Kiga 語の一般的規則のみならず、他の活用では係わってこないような幾つかの要素を考慮しないと正しい形が導き出されない。それをまとめると (23) のようである。

- (23) a. 動詞語根の声調、すなわち L あるいは H によって活用形の声調が異なる¹⁸。
- b. 動詞に目的代名詞が用いられるか用いられないかによって動詞声調と語尾が異なる。
- c. 目的代名詞が用いられない場合は、動詞語尾は **-a** となり、H 語根動詞の H 声調は消され、L 語根動詞と H 語根動詞の区別は中和する。
- d. 再帰代名詞以外の目的代名詞が用いられると L 語根動詞では H 声調が語根の 1 つ右の音節の母音に付与される。そして H 語根動詞では語根の H 声調が保持される。
- e. 動詞に目的代名詞が用いられ、それが 1 人称単数以外の場合は、動詞語尾が **-e** となる。

¹⁸ これは Kiga 語動詞の活用全般に係ることである。

- f. 動詞の目的代名詞が1人称単数の場合は動詞語尾が **-a** となる。
- g. 動詞の目的代名詞が再帰代名詞の場合は再帰代名詞の H 声調のみが現れ、他の動詞要素の H 声調は消される。

(23) で挙げた事項は Kiga 語動詞の命令形形成に係る特徴であるが、同時に、これらはウガンダ西部に話される Kiga 語と近い親縁関係にある言語において多くが共通する特徴でもある。

参考文献

- Kaji, Shigeki. 2023. *A Rukiga Vocabulary*. Kyoto, Shoukadoh for the Center for Language Studies.
- Kaji, Shigeki. 2024. “Palatalization and Velarization in Rukiga Pronunciation”. To appear in *Working Papers in African Linguistics* 3.
- Kaji, Shigeki. in preparation. *Kiga Verb Conjugations*.
- Simons, Gary F. and Charles D. Fennig. (eds.) 2017. *Ethnologue: Languages of Africa and Europe* (Twentieth Edition). Dallas, SIL International.

Abstract

The Imperative of Rukiga

KAJI Shigeki

This paper investigates the Rukiga imperative mood. Rukiga is a Bantu language from southwestern Uganda. The Rukiga imperative is used to give direct affirmative orders to the second-person singular; however, it does not have any negative forms and is not used in the second-person plural, for which the subjunctive mood or the verb **okureka** “to leave, to abandon” in the imperative and/or subjunctive mood are employed, which this paper does not deal with.

The formal characteristics of the Rukiga imperative mood are as follows: 1) when the verb is not used with an object pronoun, its ending is **-a**, and the H tone of the H-toned radical is deleted, that is, the distinction between the H-toned and the L-toned radical verbs is neutralized; 2) when the verb is used with object pronouns other than the first-person singular, the verb ending is **-e**; 3) when the verb is used with the first-person singular pronoun, the verb ending is **-a**; 4) when the verb is used with object pronouns (except the reflexive pronoun), L-toned radical verbs have an H tone on the vowel right of the radical, and H-toned radical verbs restore an H tone on the radical vowel; and 5) when the verb is used with the reflexive pronoun, which is H-toned, all verb elements lose their H tone.

Keywords: Bantu, Kiga, imperative, verb ending, tone